

「かつこいい彼女」 12・1秒の恋物語 紹介文

岡和田晃

『エクリップス・フェイズ』日本語版翻訳監修者の朱鷺田祐介による「かつこいい彼女」をお届けしよう。

とりわけ生活に密着したテクノロジーの進展に主題をあてるサイバーパンク以後のSFの面白さに、日常生活をそれまでとは異なる眼差しで眺め、異化させるといったアプローチが存在する（たとえば、ウィリアム・ギブスンの『パターン・レコグニション』など）。

本作もまた、その系列に連なる一作で、日常をフィクションに昇華させ、また『エクリップス・フェイズ』的な解釈を加える過程で、独特の面白さが生まれている。筆者は『ラッকারの奇想博覧会』に収められたサイバーパンクの代表的作家の一人、ルーディ・ラッকারの東京滞在記を、どこか連想させると感じた。

高度に情報化が進み、大規模ネットワークであるメッシュや、支援AI・ミュージブが存在する近未来社会で、恋愛の模様はどのように変化するのだろうか。

それまでの朱鷺田祐介作品とは、またひと味もふた味も違う切り口となっているが、クリスマスのお供に、本作を通してしばし未来社会の恋愛風景について思いを馳せてみてほしい。

朱鷺田祐介はこの秋に開催されたゲームマーケット2014にて開始された「ゲームマーケット大賞」の選考委員をつとめ、またドイツのエッセンで開催された世界最大のボードゲームの祭典「[SPIERL'14](#)」の「[レビュー](#)」を「4Gamer.net」に寄稿するなど、精力的に活動のスケールを広げている。